

# 児島虎次郎とフランソワ・パイク

松岡 智子

倉敷芸術科学大学芸術学部

(1998年9月30日 受理)

## 1. はじめに

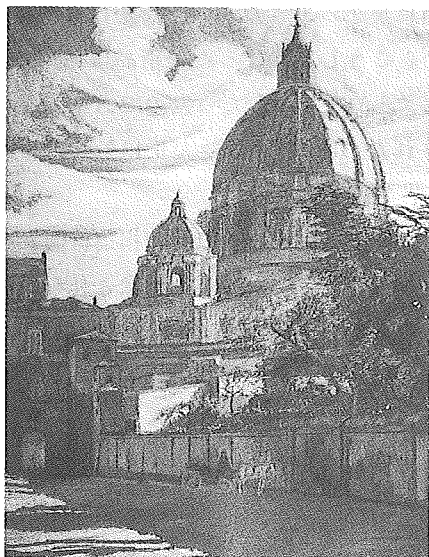
筆者は、大原美術館創設に尽力した画家児島虎次郎（1881－1929）のベルギー時代の足跡について、これまで彼の美術品蒐集活動を中心に研究発表を行ってきた（註1）。本稿では、児島と交流のあったベルギーの画家たちの一人であるフランソワ・パイク（1890－1960）が児島に宛てた未公開書簡7通のなかから、日付が明確でパイクが大原美術館設立過程に関係したと考えられる記述が見られる2通を紹介する。これらと二人の関係を記した児島の「日記」は、画家であるとともに、1920年代を中心とした日本とベルギー間の文化交流者としての児島とパイクの存在を浮き彫りにするものと思われる。

## 2. 関東大震災とフランソワ・パイク

フランソワ・パイクは1890年、ベルギー・アントワープに生まれ、児島虎次郎や太田喜二郎とともにアントワープ美術アカデミーで学んでいる。彼は風景画、人物画、静物画を描く画家としてアントワープを主な舞台に活躍し、『ベネジット』

（E. Bénézit, dictionnaire critique et documentaire des peintres, sculpteurs, dessinateurs et graveurs, Paris, 1976.）にもその名が記載されているが、今ではほとんど忘れ去られてしまっている。しかし、意外にも彼の作品「ローマ聖ピエトロ大聖堂」（挿図1）が東京・三の丸尚蔵館に所蔵されており、1997年1－3月に同館で開催された「ヨーロッパの近代美術－歴史の忘れ形見」展で公開された。では、この作品がどのような経緯で日本にもたらされたのだろうか。

「ローマ聖ピエトロ大聖堂」は、大正13年（1924）11月16日から22日にかけて、当時、麹町元衛町にあった内務省社会局で行われた「ベルギー作家寄贈絵画展覧会」に出品され、皇室



挿図1 フランソワ・パイク  
《ローマ聖ピエトロ大聖堂》  
1921年 宮内庁三の丸尚蔵館蔵

買い上げになったもののなかの1点である。その時に発行された展覧会出品目録（註2）によれば、総数134点の作品が第1室から8室に分けて展示されており、目録番号3であるこの作品は第1室に飾られていたことになる。

「ベルギー作家寄贈絵画展覧会」開催の発端は、大正12年9月1日に起こった関東大震災である（註3）。そのニュースは、神戸のベルギー総領事の打電によって、直ちに本国に伝えられた（註4）。ベルギーの対応は迅速をきわめ、5日、外務大臣ヤスパールは、「ベルギー・日本協会」会長コンスタン・ゴーフィネ男爵に「日本人罹災者救援ベルギー国内委員会」の結成と運営を委任する。ゴーフィネ会長は、まず、顧問員会、実行委員会、事務局の三組織を結成し、ベルギー赤十字社やベルギー・ソシエテ・ナショナル銀行の協力を得、迅速に活動を開始する。実際の活動方法としては、各地域ごとに地方委員会を設け、それに大幅な自由裁量権を与えて行うことになり、地方委員会が国内委員会に協力を求めた場合、いつでもこれに応じることにした。音楽会、講演会、バザーなども各地で催された。さらに「日本の日」が設けられ、実行委員会も、そのために絹と紙で作った小さな旗のバッジ150万個を要請のあった地方委員会に無料で配布し、それらの売り上げのため各地に向けて6千枚以上のポスターを印刷した。新聞やカトリック教会もこのキャンペーンに積極的に参加している。ベルギー各地から集められた義援金は早くも12日には電報為替で日本に送られており、以後、定期的に送金が続けられた。

さて、こうしたベルギー国民の日本人罹災者の運動に対して、多くのベルギーの芸術家たちも協力を申し出、各自の作品を提供している。提案者はブリュッセル出身の画家エミール・パースである。国内委員会も協力し、数週間のうちに多くの芸術作品が日本大使館に集まってきた。そのなかには芸術家のみならず、地方委員会が蒐集したものもあった。こうして集まった美術品は134点にものぼり、そのなかの1点がパイクの「ローマ聖ピエトロ大聖堂」だったのである。これらの絵画・彫刻はいったん、ブリュッセルで公開されたのち（註5）、大正13年（1924）5月、日本郵船の「鹿島丸」でベルギーを出発し、日本へ送られた。

日本では内務省社会局が担当機関となり、池田宏社会局長官を委員長とする組織委員会が編成されていた。委員会はこれらの美術品による展覧会を開催し一般の観賞に供し、同時に販売を実施することを決定した。この計画に協力したのは、「白耳義協会」会長の大寺純蔵、武者公路公共子爵、正木直彦東京美術学校校長、そして、同学校教授の久米桂一郎と和田英作であった。「ベルギー作家寄贈絵画展覧会」と銘打った展示即売会には、招待者は別として3万5千人もの鑑賞者が訪れ、皇后は17点、皇太子は15点を買っている。134点の作品はすべて売り切れ、売り上げ総額は2万2635円、18万6千フランにのぼった（註6）。これにベルギー国内の募金金額245万5千フランを合わせると、総額は264万1千フランとなり、この金額はアメリカ、イギリスに次ぐものである。

この即売会で皇室が買い上げた作品のうち、5点が現在、三の丸尚蔵館に所蔵されてい

ることが判明しており、前に述べた「ヨーロッパの近代美術―歴史の忘れ形見」展には、そのなかの2点―フランソワ・パイク作「ローマ聖ピエトロ大聖堂」とアルペール・バケ作「フォレスト遊園の雪景」が72年ぶりに公開されたことになる。

### 3. 児島虎次郎とフランソワ・パイク

児島の「日記」には、パイクの名（あるいはピカと呼んでいた可能性もある）が明治45年4月27日の欄に最初に登場し、以後、大正14年1月8日を最後に煩瑣に記されている（註7）。「日記」によれば、児島がベルギーを訪れた際には、パイクのアトリエを借りて絵を描いたり（大正9年8月5日、大正11年10月6日）、パイクとともに制作をしたり（大正9年8月7日、大正12年1月12日）、パイクの姉までもが児島の絵のモデルを務めたほど（大正9年8月10日）、両者の関係が親密であったことがわかる。さらに、筆者が発見したパイクが児島に宛てた未公開書簡7通から新たな事実が読み取れる。それらの日付は以下の通りである（書簡3、4の原文と翻訳文を文末に掲載した）。

1. 1920年10月6日    2. 1920年12月3日    3. 1922年11月12日（挿図4）    4. 1922年11月18日（挿図5）    5. 1923年1月25日    6. 日付不明    7. 日付不明

これらのうち日付の明らかな書簡（1－5）はすべて、2度目と3度目の渡欧中、児島が美術品蒐集に奔走していた時にパイクが彼に送ったものである。文面から、自分より9歳年上で面倒見がよく生真面目な児島の人柄をパイクは信頼し、兄のように慕っていたことがうかがわれる。また、書簡4ではパイクが「あなたが最も愛する芸術に没頭できないために苦しんでいることを知り、私は残念に思います」と述べていることから、「日記」や書簡にも記述されていなかった心中の児島の苦悩、すなわち、児島的美術品蒐集活動は「日本のため」という使命感に基づいていたとはいえ（註8）、腰を据えて制作に没頭できない画家としての苦悩をパイクには吐露していたことが推測できる。

また、児島の「日記」とパイクの書簡の内容から、児島的美術品蒐集活動をパイクが手伝っていた事実がうかがわれる。「日記」にはその事実を証明する記述が1箇所あるのみであり、それは大正11年9月30日の欄の「パイクにムニエのブロンズ像の価格の問い合わせを依頼する」という内容である。児島がコンスタンタン・ムニエの作品を購入した事実の証拠となる領収証や作品リストは未見である。しかし、書簡3にも「C. ムニエのブロンズ像についての回答を受け取り次第、可能な限り早くあなたにお知らせします」と書かれており、「日記」の内容と一致するため、購入の候補に挙げられていたが、何らかの事情で実現できなかったのではないかと考えられる。その他にも、書簡5では、クールベ、ディアズ、ドーヴィニーの作品を所有する、南フランスのヴォクリース在住のコレクターを児島に紹介し（児島は彼から作品を購入しなかったが）、「あなたはフランスの巨匠たちの美術館のためのコレクションを蒐集しているのですから、これらの作品について知っておくことはあなたにとって有益だろうと思います」と述べている。この記述も、児島がこ

の時期、パイクに美術館設立構想について語っており、それはフランスの巨匠たちの作品を中心としたものであったことを裏づけるものである。

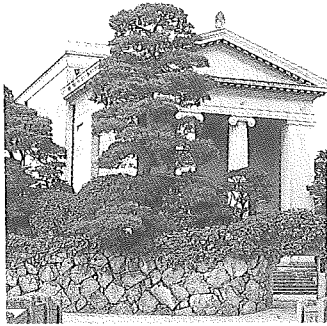
また、これまで大原美術館の建物の設計について言及されたことはなかったが、児島に宛てたパイクの書簡から、同館の建築モデルの一つとなったかもしれない設計図の入手にパイクがあたっていたという事実が確認できる。書簡3には「美術館の設計図については、私はそれを自由に入手し、私の希望する日に取りに行くことができます。」とあり、また、「美術館の設計図を探しに行き、あなたが私に預けていた本と一緒に、それをあなたに送ることを、私は承知しました」と書かれている。その1週間後に児島に送った書簡4には、「美術館の設計図を持っており、それは素晴らしいものです。館長はあなたによりしくお伝え下さいと言ひ、何なりとお申しつけ下さいとのことです。彼はすべての報酬を拒否しました。」とある。

便箋のレター・ヘッドの住所 (Boulevard des Hospices, Gand) からパイクはアントワープに在住していること、また、大原美術館 (挿図2) とアントワープ市美術館 (挿図3) の新古典風の建物の外観、なかでもファサードの円柱が双方ともイオーニア式オーダーであるという共通点も見られ、パイクが得た設計図の入手先がアントワープ市美術館であり、大原美術館設計図作成にあたり、参考例の1つとしたのではあるまいか (註9)。

#### 4. 結びにかえて

大原美術館の設計者は薬師寺主計 (1884-1965) である。彼は岡山県賀陽郡刑部村 (現在の総社市) に生まれ、明治42年、東京帝国大学工科建築科を卒業したのち、陸軍省経理局建築課に陸軍技師として勤務し、倉敷絹織株式会社常務取締役を経て、藤木工務店監査役に就任している。薬師寺は、大正10年から12年にかけて建築技術研究のため欧米各国へ出張し、パリで先に渡欧した児島と出会っており、「日記」にも薬師寺の名が登場している (註10)。つまり、児島はアントワープ市美術館の外観に類似した建物を自己の構想とする美術館の建物にしようとしたために、その設計図をパイクを通じて入手したのであり、それを参考にしながら、薬師寺にも建物の設計をも含めた具体的な美術館構想について語っていたのではないだろうか。そして、昭和4年3月、児島の死におよんで、大原孫三郎に命じられ、児島の意をくみ大原美術館の設計にあたったのではないかとと思われる (註11)。

以上から、フランソワ・パイクは児島虎次郎の絵画制作や美術館蒐集活動に協力していたばかりでなく、大原美術館の建物の設計のモデルをも提供したかもしれず、大原美術館設立過程において重要な役割を果たしていた人物の一人であったことがわかる。そして、このような両者の関係は、今まで明らかにされなかった1920年代の日本とベルギーの文化交流史の新たな一側面に光をあてるものと考えられる。なお、パイクの他の書簡については別稿で紹介する予定である。



挿図2 大原美術館正面



挿図3 ゲント市美術館正面

## 註

- 1 拙稿「児島虎次郎とエミール・クラウス」『倉敷芸術科学大学紀要 第3号』1998年3-14頁。また、1998年7月17日に東京日仏会館で開催された第78回日仏美術学会例会で、筆者が「児島虎次郎とベルギー：日記・書簡を中心に」と題し口頭発表を行った際、学会の諸先輩方から貴重なご教示をいただいた。この発表内容に基づく拙稿“Trajiro KOJIMA et la Belgique”は『日仏美術学会会報 第18号』（1999年）に掲載予定である。
- 2 内務省社会局発行。東京国立文化財研究所所蔵。
- 3 「ベルギー作家寄贈絵画展覧会」開催までのいきさつについては、磯見辰典・黒沢文貴・櫻井良樹『日本・ベルギー関係史』（白水社、1989年）344-347頁、磯見辰典「須崎御用邸の寝室の絵のルーツ」『文藝春秋 4月特別号』1997年）370-374頁を参照されたい。
- 4 ベルギー国内における援助活動の詳細については、“Japon, Tremblement de Terre du 1<sup>er</sup> Septembre 1923” ‘Société d’études Belgo-Japonaise, Bruxelles, 1925. を参照。
- 5 この時発行された展覧会カタログ（外務省外交資料館蔵）の表紙には、在ベルギー・日本大使館がこの展覧会を主催し、1924年5月14日から18日にかけて Salle DELGAY（134, rue Royale, Bruxelles）で開催されたことが記載されている。また、「ベルギーの芸術家たちによって制作され、1923年9月の地震による日本人罹災者のために寄贈された作品」というタイトルが付いている。
- 6 外務大臣幣原喜重郎宛ベルギー大使安達峰一郎の報告書、大正13年8月1日付（外務省外交資料館蔵）によれば、当時のベルギーで巨匠とされていたエミール・クラウス、クルテンス、エミール・バース、レオン・フレデリックの作品については、博物館等に永久保存されるべきであるという記述がある。しかし、筆者が調査した限りでは、ベルギー政府あるいは各作家がそれを望んでいたという証拠は見当たらなかった。したがって、この件は安達自身の考えを述べたものではあるまいか。そして、『時事新報』大正13年11月21日付の記事によれば、完売は予想外のことであり、作品購入者として若槻礼次郎、水野錬太郎、後藤新平他7名の名が挙げられている。
- 7 判読不明な箇所や紛失した部分を除けば、少なくともバイク、またはピカの名が55回も登場している。但し、同じ日付の欄に2回以上書かれている場合は1回とした。この数字は児島と交流のあったベルギーの画家たちのなかで最多である。
- 8 拙稿「児島虎次郎とジャン・フランソワ・アマン＝ジャン」『近代画説 6号』、1997年を参照。
- 9 ゲント市美術館の歴史については、Robert Hoozee “Musée des beaux-arts Gand” 1995, pp. 7-8. を参照。それによれば、ゲント市美術館は、最初、1798年にボデロ修道院内に設立され、1811年に一般公開された。そして、創立100周年にあたる1898年に新しく建設されることが決定し、1902年と1913年に実行に移されている。設計者はシャルル・ファン・ルッセルベルヘであり、ファサードは1902年に作られたものである。なお、同館には現在、児島の作品3点が所蔵されており、1998年7月、筆者が調査のため訪れた時、館内は改装中

で、学芸員のモニク・ナーゲル氏の話によれば、ゲント美術アカデミー校長を務めたジャン・デルヴァンとその弟子たちの部屋を新たに設け、そこに児島の作品を常設展示する予定であるとのことであった。

10 児島直平著『児島虎次郎略伝』（同伝記編纂室 1967年）157, 158頁によれば、薬師寺は、大阪上本町に新設中の大原家別邸の室内装飾用品買い入れのため渡欧し、大正11年8月2日からパリに1週間ほど滞在したということである。実際、8月2, 3, 5, 7, 8, 9日の児島の「日記」の記述から、児島は薬師寺と行動を共にしていることがわかる。

11 児島虎次郎の孫にあたる塊太郎氏から筆者が確認した事実によれば、薬師寺は、将来の美術館設立のためにゲント市美術館の設計図を虎次郎から渡されていたことを、甥の直平氏に話していたということである。その事実とパイクの書簡の内容は、筆者の推測を裏づける傍証の一つになるものと思われる。また、児島が入手したと思われるゲント美術館の設計図の所在については、現在、調査中である。

## 新発見史料ーフランソワ・パイク書簡

### 凡例

- ① 史料中の明白な脱字は〔 〕で補足した。
- ② フランス語の文法上の誤りは[sic]を付した。
- ③ 判読不能なアルファベットについては□で表記し、その単語を翻訳する場合には「……」で表記した。
- ④ 大文字や小文字、トレ・デュニオンの誤用については、煩瑣となるためあえて指摘せず原文のままとした。

書簡 3 Gand, le 12 novembre 1922

Mon très cher ami Kojima,

Je suis très heureux d'avoir reçu de vos nouvelles. Ne craignez pas de m'avoir négligé! C'est trop naturel et je comprends trop bien que vous devez avoir été inondé d'un travail pareil à votre retour à Paris.

Seconde moi! Je vous aurai bien écrit mais j'attendais la réponse de Bruxelles qui n'est toujours pas arrivée.

Je viens d'envoyer une seconde lettre sur laquelle j'attends la réplique. Les plans du musée se trouvent à ma disposition et je puis aller les prendre le jour que je veux.

J'attendais votre arrivée pour aller les chercher ensemble, malheureusement je constate dans votre lettre que mon espoir de vous revoir chez moi est vain.

Enfin toujours est-il que si vous ne savez pas vous rendre à Gand avant janvier! moi j'irai à Paris où j'aurai le bonheur de vous voir et causer quelques fois j'espère.

Vous me dites, Cher Ami, d'être certain que je pense souvent à vous! cela est très vrai et souvent aussi je me demande comment et pourquoi vous m'êtes devenu cher, et toujours j'ai fini par trouver en vous le meilleur de moi-même. C'est pourquoi vous me servez d'exemple de noble beauté d'âme

et de tempérament supérieur.

Le beau pour moi, c'est que cet exemple me donne l'espoir de m'améliorer.

Et! ami, si le temps nous manque et les grands espoirs nous défendent de nous voir plus souvent, toujours est-il que la sympathie et l'amitié que nous nous portons mutuellement ne rencontrent pas d'obstacles et que les ondes télépathiques nous les transmettent à travers les plus grandes destinées.

Ne vous en voulez donc pas de me négliger, je n'en crois rien, tant parfaitement convaincu du contraire.

Mes toutes petites bontés ne sont rien en comparaison des vôtres et à ceux qu'on voudrait bien extérioriser à l'approche d'un ami.

Et je le considère même d'une très vive récompense de pouvoir les placer.

Je regrette, regrette infiniment, de ne pas pouvoir vous voir chez moi encore une fois, Hélas! je me rends à l'évidence, avec la certitude que ce n'est qu'une joie remise à une meilleure et autre heure. et je regrette davantage de vous savoir peiné par l'impossibilité de vous remettre à votre art chéri.

J'aurais bien voulu vous savoir en plein travail car je sais par expérience que c'est notre seul bonheur.

Quant à moi, j'ai travaillé encore un peu après votre départ et je m'occupe maintenant à organiser mon exposition au Cercle Artistique et Littéraire, et qui se tiendra du 26 novembre au 8 Décembre du mois prochain. J'espère d'elle un bon résultat pour savoir accomplir [au] mieux mon prochain voyage.

Il est entendu, ami, que j'irai maintenant chercher les plans du musée que je vous enverrai, avec le livre que vous avez laissé chez moi.

Quant à votre tableau : je vous l'apporterai moi-même à ma prochaine visite à Paris qui se fera au commencement du mois de janvier.

Aussitôt que je recevrai la réponse sur les bronzes de C. Meunier, j'aurai le plaisir de vous la communiquer le plus vite possible.

Le jour des Morts, je me suis rendu au cimetière pour visiter le tombeau de mon père [mais] aussi que celui de Monsieur Delvin sur lequel j'ai déposé deux pots de chrysanthèmes, un pour vous et un pour moi.

Et maintenant cher ami, pour terminer, je voudrais bien vous demander un service qui est de bien vouloir, si le temps ne vous manque pas, [de] me faire envoyer les couleurs que je ne puisse me procurer ici et que vous employez comme par exemple les verts composés de Blocs, et quelques autres que vous connaissez mieux que moi. mais pas celles qui sont condamnées à disparaître, SVP.

Dans l'espoir de vous revoir bientôt, je vous envoie, cher ami, mes amitiés les plus chaleureuses et l'assurance de mon dévouement le plus sincère, en vous remerciant infiniment pour les bonnes paroles et les sentiments que vous avez bien voulu me témoigner.

Bien des compliments de ma famille.

Votre Ami François

P. S. : 《Un très amical bonjour de la Dame  
à la robe bleue!!! S. V. P.》

1922年11月12日

親愛なる友人児島へ、

あなたの手紙を受け取り、私は大変嬉しく  
思っています。私を放っておいたこ  
とを気にしないで下さい。それはあまり  
に自然なことですし、パリに戻っても同  
様に、あなたが仕事に追われていただろ  
うということはわかり過ぎるほどわかっ  
ています。

私は二の次でよいのです！私はあなた  
に手紙を書いたのですが、いつも届くわ  
けではないブリュッセルからの返事を  
待っていたのです。

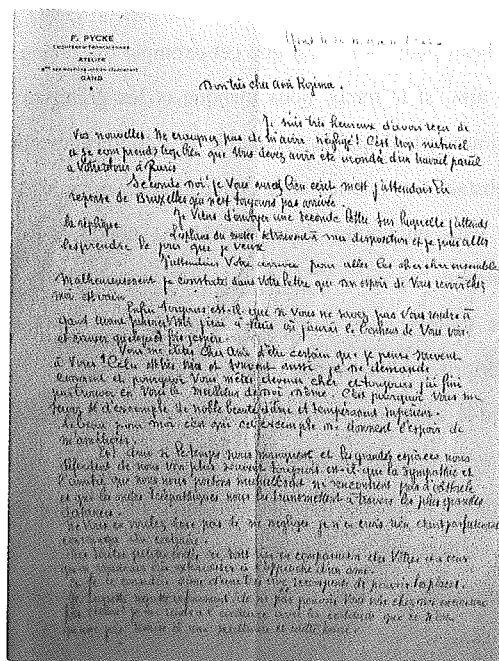
私は2通目の手紙を送ったところであり、それに対する返事を待っています。美術館の  
設計図については、私はそれを自由に入手することができ、私の希望する日に取りに行く  
ことができます。それらをあなたと一緒に探しに行くために、私はあなたの到着を待つて  
いました。しかし、不運なことに、あなたの手紙によれば、あなたを私の家にお招きした  
いという私の願いはかなえられそうにないようです。

ともかく、1月以前に Gent に戻るかどうかあなたは今もわからないのですね！私はパ  
リに行きますが、運良くそこであなたに何度もお会いし、お話ができることを期待してい  
ます。

私があなたをしばしば思っていることは確かです。そのことは全く真実であり、私もま  
た、あなたが私にとって、どのように、そして、何故、大切な人となったのか自分に問  
かけています。そして、常に、あなたのなかに私自身の最良のものを見つけることで終  
わるのです。あなたが私に、魂の高貴な美しさと崇高な気質の模範を私に提供するの  
は、そういう理由からなのです。

私にとっての美とは、そうした規範が自分を変えようとする希望を私に与えるとい  
うことです。

ああ、友よ。たとえ、私達に時間がなく、大いなる希望がもっと頻繁にお互いが会  
うことを禁じようとも、二人が互いに分かち合う親しみと友情が、障害を避け、精神感  
応の波



挿図4 児島虎次郎宛フランソワ・パイ  
ク書簡 1922年11月12日付



動が、最も大きな天命を介して、私達にそれらを常に伝えるのです。

どうか、私を放ったらかしにしないで下さい。もっとも私はまったくそうは思っていない。それどころか、完全にその逆であることを確信しています。

私のすべての小さな親切は、あなたのものと比べたら何ほどのものでもありません。人は友人に接する時、それらをうまく表面に表すことを望むのです。

これらのすべての小さな親切をあなたに示せることが、私にとってはそれ自体が報酬であるとさえ思っています。

私の家でもう一度、あなたにお会いできないことに対し、私は再び、限りなく残念に思います。ああ、それは最良の別な時間にとっておく楽しみでしかないと確信しつつ、私は明白な事実屈服するのです。それ以上に、あなたにとって最愛の芸術に没頭できないことでああなたが苦しんでいることを知り、私は残念に思います。

私はあなたが膨大な仕事をかかえていることを知りたいと思っていました。何故なら、それが私達にとって唯一の幸福であることを、私は経験上、知っているからです。

私事ですが、私はあなたが出発したのち、もう少し仕事をしました。そして、今、私は芸術・文学サークルで開催される個展の準備をしています。それは11月26日から12月8日まで行われます。次回の旅行をさらにスムーズに実現可能なものとするため、展覧会がよい成果を得ることを私は期待しています。

美術館の設計図を探しに行き、あなたが私に預けていた本と一緒にそれをあなたに送る件については承知しました。

あなたの絵についてですが、1月初めの今度のパリ旅行の時に、私があなたの所に持って行きましょう。

コンスタンタン・ムニエのブロンズについての回答を受け取り次第、できるだけ早く、あなたにお伝えできることを私は楽しみにしています。

万霊節の日、私は父とデルヴァン氏の墓参りをしました。デルヴァン氏の墓に2つの菊の花束を供えました。1つはあなたの分、もう1つは私の分です。

最後になりますが、私はあなたに1つのことをお願いしたいのです。もし、時間がおありでしたら、ここでは入手できない絵の具、例えば、緑など、私よりもあなたの方でよくご存知のものを私に送っていただけないでしょうか？しかし、在庫のないものは構いません。どうかよろしくお願いします。

もうすぐあなたに再会できることを楽しみにしています。そして、あなたが私に示そうとした良き言葉や暖かい心に対し、私は心から感謝しています。

そして、私の家族からもよろしくお伝え下さいとの事です。

あなたの友フランソワ

追伸： 青いドレスを着た夫人から、あなたにくれぐれもよろしくお伝え下さいとの事です！！！！

書簡 4 Jeudi 18 novembre 1922

Mon très cher Ami,

J'ai été vivement touché par votre aimable invitation.

Mais comme je suis tout près de mon exposition, je me suis d'abord renseigné sur la date de fermeture du Salon d'automne. Après beaucoup de difficultés, je suis parvenu à savoir que le Salon reste ouvert jusqu'à fin Décembre.

S'il aura du fermer [sic] avant le 1<sup>er</sup> du mois prochain, je serais venu [sic] le 20 prochain, mais, comme il me reste le temps, je me suis décidé de venir vous voir seulement le surlendemain après l'ouverture de mon exposition, qui sera donc le 28 prochain.

Il paraît qu'il [y] a un tain □□reet à la gare du Sud, qui part à 6 heures du Matin avec le résultat d'être à Paris vers midi.

Par conséquent, cher ami, si cette date vous arrange, j'aurai la joie d'aller vous voir à la date citée ci-dessus.

Les plans du musée sont entre mes matins, et sont superbes.

Le Directeur m'a prié de vous faire ses compliments et de vous dire qu'il se tient à votre disposition pour n'importe quelle [sic] service. Il a refusé tout paiement!!

Espérant, cher ami, que vous êtes en bonne santé, je vous dis à bientôt en vous présentant mes meilleures amitiés.

Votre Dévoué.

François

1922年11月18日

親愛なる友へ、

私はあなたの丁寧なお招きに深く感動しました。

しかし、私の個展が間近なので、私はまず、サロン・ドートンヌの終了日を調べました。多くの困難ののち、私はサロンが12月末まで開催していることを知ることができました。

もし、サロンが来月の1日に終了するのでしたら、私は20日に行くのですが、会期が残されているので、私の個展の開催日の翌々日のみ、すなわち来月の28日にあなたに会いに行こうと決めました。

南駅を朝6時に出発し、パリに正午頃到着す

挿図5 児島虎次郎宛フランソワ・パイク書簡 1922年11月18日付

る「……」の列車があると思います。

したがって、この日があなたにとって都合がよければ、先に挙げた日にあなたに会いに行くことを私は楽しみにしています。

私は設計図を持っており、それは素晴らしいものです。館長はあなたに「よろしくお伝え下さい」、そして、「何なりとお申し付け下さい」とのことです。彼は報酬をすべて断りました！！

どうかお元気で。

フランソワ

## Torajiro KOJIMA and François PYCKE

Tomoko MATSUOKA

*College of the Arts*

*Kurashiki University of Science and Arts,*

*2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*

(Received September 30, 1998)

Torajiro Kojima (1881–1929) is known as not only a painter but also founder of the Ohara Museum of Art. I have discussed a significance of the period in Belgium in his life, mainly from the point of view of collection of works of art. Kojima studied a Western painting in the Academy of fine arts of Ghent and bought a number of Belgian paintings. I found a many letters and receipts, which have not opened to public, from Belgian painters to Kojima. This time, I introduce 2 letters from François Pycke, who was active mostly in Ghent (We are able to find his work “St Peters Cathedral in Rome” in the Museum of Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan in Japan). According to his letters and Kojima’s diary, Pycke was on close terms with Kojima, and helped him to collect the Belgian paintings and found the Ohara Museum of Art.